



上廣死生学・応用倫理講座  
特任教授  
会田 薫子

上廣死生学・応用倫理講座は公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付

講座です。2007年度に上廣死生学講座として開設され、2012年度以降は死生学に

加え応用倫理も担当領域として研究と教育および実践活動を進めてまいりました。

そして2017年度にはその成果を踏まえ第3期5カ年の新たな歩みを始め、2021年度は第3期の5年目となりました。今年度も一層の研究展開と社会貢献を進めてまいる所存です。

死生学は単に「死について」の学ではなく、死を生に伴い、また生が伴うものとして、「死生」を一体として考え、人間が死生をどう理解し対処してきたかについて、人文知を背景に広く考えようとしています。

その意味で東京大学の死生学研究は2002年以来、死生学を“thanatology(死の学問)”というよりも“death and life studies”として捉え、人文社会系を中心とする学際的な研究プロジェクトを進めてまいりました。

当講座は死生学の中核領域である臨床死生学の研究と実践活動を軸に展開しております。臨床死生学は臨床現場で実践の知としてはたらく学問です。医療機関や介護施設、在宅医療・介護の場などの医療

とケアの現場において、死生をめぐる諸問題に関し、患者（利用者）本人と家族および医療とケアに携わる人々のニーズに応え、死生学が得た知見を医療とケアに活かすことができるようなかたちにして提

供しようとしています。その際、医学的にも最新の知見を取り入れます。

このように文理融合の知を創出しつつ、上廣死生学・応用倫理講座は臨床死生学と臨床倫理を軸とする研究と実践活動に注力しています。臨床倫理は臨床現場において、一人ひとりの治療やケアや療養場

所などの選択に際し、本人を人として尊重する意思決定の実現を目指します。

その実践的研究の成果は医療・ケアの臨床現場に浸透しつつあり、高齢者ケアの領域などで実績をあげてきました。

当講座は東京大学大学院人文社会系研究科内におかれた死生学・応用倫理センターにおいて研究・教育・実践活動を行っており、当講座の活動に死生学・応用倫理センターの中心メンバーの協力を得て、講座

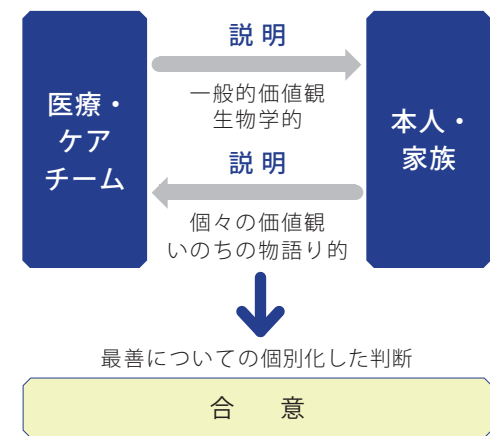
のバランスある活動の展開を目指しています。

## 臨床倫理プロジェクト

本講座のおもな研究・実践活動の1つは《臨床倫理プロジェクト》です。「臨床倫理」は、医療・介護の現場で、医療・ケア従事者たちが、患者（利用者）本人や家族と応対しながら医療・ケアを進めて行く際に起きる諸問題について「どうするのがよいか」を、本人を中心に考える営みです。本プロジェクトは次の3点をおもに目指しています。

- 日本の文化に合った臨床倫理の考え方と検討の方法を見出し、それを普遍的に理解できる言葉で表現すること。これまでの研究成果である、「カンファレンス用ワークシート」などの臨床倫理検討シートを用いた事例検討の演習を、全国各地で行っている臨床倫理セミナーに組み込み、現場における実装を目指すこと
- 現場の医療・ケア従事者との協働で実践的研究を進め、医療・ケアの質の向上、今後の医療・ケアの望ましいあり方の実現に寄与すること
- 医療・ケアの現場で死生の問題をどう考えるべきかという臨床死生学の課題を臨床倫理的に検討すること。それによって新しい時代の看取り文化の創成に貢献すること

### 本プロジェクトの基本的なコンセプト



### ●意思決定プロセスの「情報共有－合意」モデル

医療・ケアを提供する側が有する情報と医療・ケアを受ける本人・家族側が有する本人の生活と人生に関する情報を互いに提供して共有することをベースにしつつ、コミュニケーションを通して合意を目指します。これは清水哲郎前特任教授が国内の医療・ケア従事者と30年にわたる協働によって開発した、国内独自開発の共同意思決定（SDM：shared decision-making）のモデルです。

### ●生命に対する人生の優位

私たちのいのちには、生物学の対象になる生命という相と、自分のいのちの物語りを創りつつ一步一步進む人生という相があります。身体が支えてくれないければ、人生は展開できません。ですから、人生を豊かに展開するために、生命を整える必要があるのです。

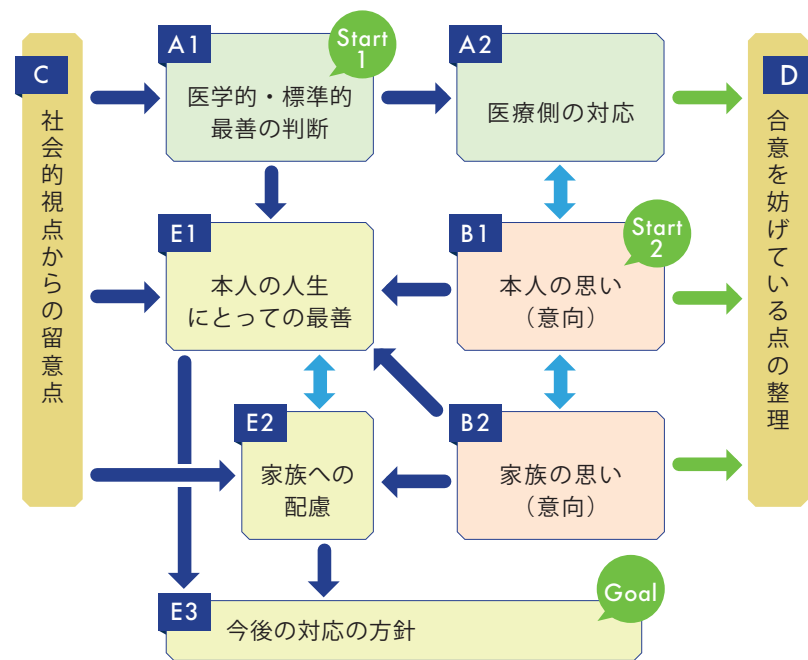
### 臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成研修の開催

「臨床倫理プロジェクト」の活動として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成講座を開催し、基本的な考え方のレクチャーと事例検討の演習を行ってきました。2019年度は全国で約2,600名にご参加頂きましたが、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で活動を縮小せざるを得ませんでした。2021年度はリモート開催の拡大を目指します。右記は事例検討の演習で使用している臨床倫理検討シート（カンファレンス用ワークシート）になります。

検討シートを用いて分析する臨床倫理の方法は、『臨床倫理の考え方と実践』として2021年に東京大学出版会から刊行される予定です。

臨床倫理検討シートは、以下のサイトからダウンロードできます。

<http://clinicaethics.nc.jp/cleth-prj/worksheet/>



## 意思決定支援ツールの開発と死生に関する思想的・倫理的的研究

長命は人類が希求してきたところであり、医学・医療が目指してきた生存期間の延長は寿命革命につながりました。一方、さまざまな加齢変性を抱えながら最期へ向かう過程において、医療のためにかえって本人の苦痛が増す場面もみられるようになりました。多くの人にとって人生は長くなりましたが、老衰の進んだ超高齢者に負担となる医療行為が行われることも多くなりました。私たちはこのジレンマにどのように対応すべきでしょうか。これは臨床現場において「生き終わり」のあり方を考察する臨床死生学の中核のテーマです。

当講座ではこのテーマに関わる課題について、臨床現場における意思決定を支援するため、さまざまな取り組みを行ってきました。その主だった成果として、まず、日本老年医学会の研究班員として取り組んだ「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン－人工的水分・栄養補給の導入を中心として」(2012)の策定が挙げられます。

その後、この課題を本人と家族の視点から捉え、本人と家族が医療・ケア従事者の助言を得ながら最善の選択に至ることを支援するため、『高齢者ケアと人工栄養を考える－本人・家族のための意思決定プロセスノート』を2013年に出版しました。その成果を踏まえ、慢性腎臓病の専門医療者との協働で、『高齢者ケアと人工透析を考える－本人・家族のための意思決定プロセスノート』を2015年に出版しました。いずれのノートも、本人・家族らと医療・ケア従事者が本人の最善のために一緒に考え共同意思決定（SDM）に至ることを支援するためのツールです。

また、科学技術振興機構社会技術研究開発センター（RISTEX）のプロジェクトとして、高齢者が最期まで自分らしく生きることを支援するために『心積もりノート』を2015年に開発し、そこに会田の frailty 研究の知見を取り入れ、2018年に改訂版を発行しました。また、本講座に日本学術振興会特別研究員として所属した日笠晴香（現・岡山大学専任講師）と本講座元研究員の園増文（現・東北大学助教）は『子宮内膜症で悩んでいるあなたに－意思決定プロセスノート』(2018)を著しました。

さらに、日本老年医学会が発表した「ACP 推進に関する提言」(2019)、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行期において高齢者が最善の医療およびケアを受けるための日本老年医学会からの提言－ACP 実施のタイミングを考える」(2020)においても、会田らの研究成果が活かされています。

また、現在進行中のAMED 研究課題2件（柏原直樹班、三浦久幸班）においても、意思決定支援ツールの開発に携わせて頂いています。

さらに本講座では、意思決定支援ツールの開発に加えて、現場の臨床実践を下支えし豊かに捉え直すような多角的な思想的・倫理的的研究を行い、その成果を広く社会に還元しています。その一つの成果が本講座の協力教員も執筆に加わった『医療・介護のための死生学入門』（東京大学出版会、2017）です。

2017年度から本講座に加わった早川は、人間存在の傷つきやすさや依存性に着目する「ケアの倫理」の観点から、死生をめぐる諸問題を考察すること、臨床倫理における人間理解を理論的・思想的に奥行きのあるものにするを試みています。また特任助教の田村は死やケアについて透徹した思索を展開したハイデガーの研究をもとにして、人間の死生をめぐる哲学的・倫理的問題を根本的に考察し、特任研究員の坂井は臨床現場における本人側と医療・ケア従事者間のコミュニケーションについて社会学の方法論を用いて実証研究を行い、知見を発信しています。



## 各種活動

臨床倫理プロジェクトの研究成果を社会に還元する活動に力を入れています。社会還元は同時に、研究成果が臨床現場において実際に有効かどうかを確認し、さらに改善しようとする実践的研究でもあります。

### 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科での教育活動

死生学・応用倫理センターは部局横断型《死生学・応用倫理教育プログラム》を提供しています。これは全学に開かれたものであり、一定の単位を取得すると卒業時に修了証が交付されます。本講座教員は「死生学概論」、「応用倫理概論」を含め、本プログラムが提供する科目を数多く担当してきました。

### 《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

臨床現場で働く方たちが死生についてどのように理解し、どのように医療とケアに活かしていくかを研鑽していただくための活動です。毎年、各種講義と演習で構成する夏季セミナーとレポート書き方セミナー、およびエンドオブライフ・ケアをテーマとする春季シンポジウムなどを行っています。

さらに、本コースの単位として認定する研究会・講演会があります。受講者は所定の単位を取得し、修了レポートを提出すると、審査を経て修了が認定されます。2020年度の春季シンポジウムは「人生の最終段階と透析療法－緩和ケアとACPの役割」というテーマでオンライン開催し、1400名を超える方々に参加申し込みをいただきました。

### 臨床死生学・倫理学研究会

水曜日夜（年10回程度）、東京大学本郷キャンパスで開催してきました。死生の問題に関わる分野の方に発表をしていただき、参加者がディスカッションする研究会です。2020年度はコロナ禍のなか、オンラインで6回開催しました。2021年度もオンライン開催を継続します。第一線の臨床家や研究者の講演の他、死生に関わる市民の活動、若手研究者の意欲的な研究など、さまざまな場面からテーマを選んでいます。

### 2020年度のテーマと講演者

10月14日(水)	「いのちを哲学する。西田幾多郎からのヒント」 中岡 成文 (一般社団法人 哲学相談おんころ 代表理事/元 大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学教授)
11月4日(水)	「新型コロナウイルス感染症とエンドオブライフ・ケア」 三浦 久幸 (国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部長)
11月25日(水)	「透析中止を希望した患者とその家族への意思決定支援」 田中 順也 (堺市立総合医療センター 慢性疾患看護専門看護師)
12月9日(水)	「コロナ禍における死の消費」 磯野 真穂 (文化人類学・医療人類学系/慶應大学大学院 健康マネジメント研究科 研究員)
12月23日(水)	「救命救急センターにおけるエンドオブライフ・ケア」 塩見 直人 (済生会滋賀県病院 救命救急センター長/久留米大学医学部救急医学講座 准教授)
1月13日(水)	「コロナ時代のメンタルヘルスと対話の可能性」 斎藤 環 (筑波大学医学医療系 社会精神保健学分野 教授/精神科医 オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン (ODNJP) 共同代表)



# 上 廣 死 生 学 ・ 応 用 倫 理 講 座

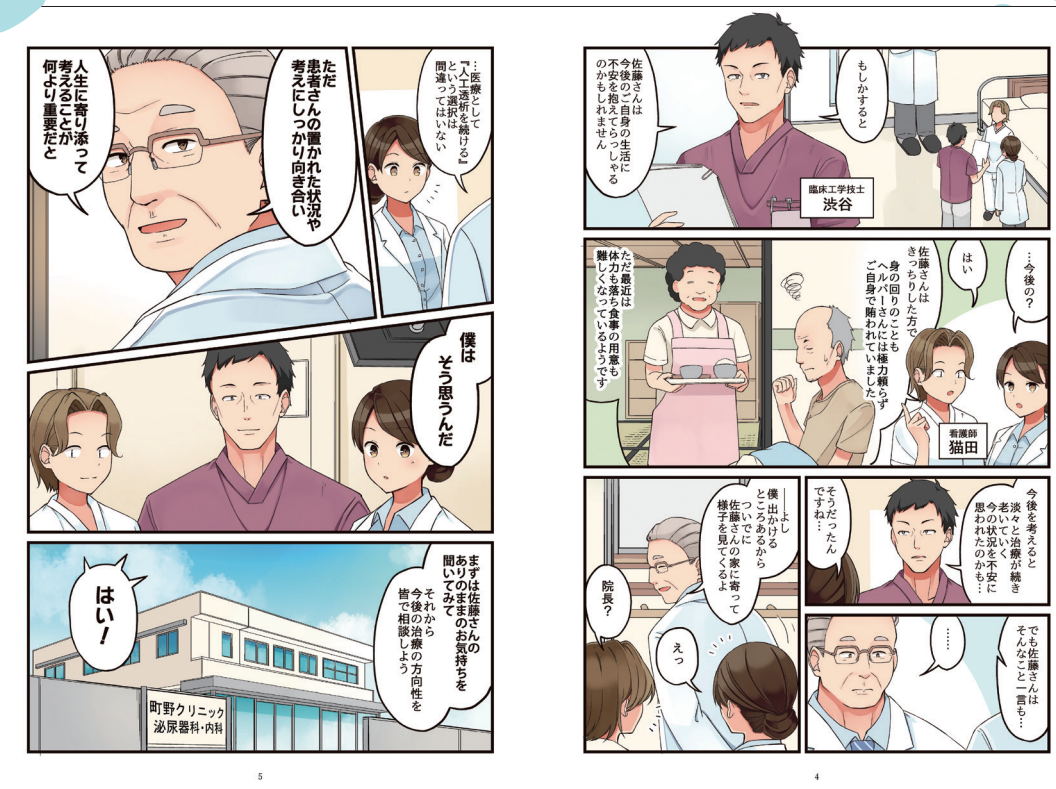
Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics,  
Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

2021

## AMED 長寿科学研究の成果

会田が研究開発分担者になっている AMED 長寿科学研究開発事業「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」(研究開発代表者: 柏原直樹) では、「医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」を開発中です。以下は「ツール」第1章の抜粋です。本章は大賀由花(山陽学園大学)が執筆し、会田、齋藤凡(東大病院)、守山敏樹(大阪大学)が協議し作成しました。

### 第1章 維持血液透析を「やめたい」と患者さんが言うとき



「透析をやめたい」と佐藤さんは言います。  
どのようなお気持ちなのでしょうか？

佐藤さんのような「治療をやめたい」という気持ちを患者さんから吐露されたことはありますか？それほどの状況でしたか？もしかしたら患者さんは、あなたを選んだ、気持ちを伝えてくださったのかもしれません。

「やめたい」ということは、患者さんに「やめたいと思わせる何かの理由がある」ということでしょう。他にも、生活の中で困っていること、悩んでいることがあるのかもしれません。

医療者として、患者さんの日々の生活に関心を寄せてお話を聞きすることは、ケアの始まりとなるでしょう。

介入としては、「積極的傾聴」「不安を和らげること」「回想法」「価値明確化」「共に在ること」「家族支援」「コーピング強化」(藤村龍子, 2006) 等、様々なケアが想定されるでしょう。

患者さんから「治療をやめたい」と言われたときに、それを即、患者さんの「自己決定」と判断して治療を終了するのは、医学的・倫理的に不適切です。まず、患者さんの発言の背景を知り、真意に迫ろうという姿勢で、患者さんと対話してみてください。そうすると、本当に必要な支援が見えてくる 경우가多々あります。

## People

■ 会田 薫子 特任教授 (あいたかおるこ)  
略 歴 東京大学大学院医学系研究科健康科学専攻博士課程修了(保健学博士)。ハーバード大学メディカル・スクール医療倫理プログラムフェロー、上廣死生学・応用倫理講座特任准教授を経て現職。  
専 門 臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学  
主要著書 『長寿時代の医療・ケア—エンドオブライフの論理と倫理』(ちくま新書)、『延命医療と臨床現場：人工呼吸器と胃ろうの医療倫理学』(東京大学出版会)、『シリーズ生命倫理学第3巻 脳死・臓器移植』(丸善出版、共著)、『シリーズ死生学第5巻 医と法をめぐる生死の境界』(東京大学出版会、共著)等。

■ 早川 正祐 特任准教授 (はやかわせいすけ)  
略 歴 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程修了(文学博士)。上智大学哲学研究科特別研究員、東京大学上廣死生学・応用倫理講座特任研究員、三重県立看護大学看護学部准教授を経て現職。  
専 門 哲学・倫理学、臨床死生学  
主要著書 *Moral and Intellectual Virtues in Western and Chinese Philosophy: The Turn toward Virtue* (Routledge、共著)、『言葉の歎び・哀しみ』(東信堂、共著)。

■ 田村 未希 特任助教 (たむらみき)  
専 門 哲学  
個々人それぞれの歴史的・社会的・文化的背景が異なる中で、それでもなおお手を理解しようとするにはどうすれば良いのか、という問題に、ハイデガーの哲学を手がかりとして取り組んでいます。

■ 坂井 愛理 特任研究員 (さかいえり)  
専 門 社会学  
触れること・触られることを通して、治療やケアの社会関係がどのように組織されているのかを、老いや麻痺のある身体に対するマッサージ場面を対象に分析しています。

■ 安野 裕美 特任専門職員 (やすのひろみ)

### 死生学・応用倫理センター

上廣死生学・応用倫理講座総括監督者 死生学・応用倫理センター長  
■ 池澤 優 教授 (宗教学) (いけざわまさる)  
専 門 中国宗教史、死生学、生命倫理学  
上廣講座の《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースのセミナーで講師をするほか、東京大学の部局横断型《死生学・応用倫理教育プログラム》の立案と実施を担当し、またその分野における国際的研究交流を企画しています。

■ 鈴木 晃仁 教授 (すずきあきひと)  
専 門 医学史  
精神医療の歴史と感染症の歴史が専門になります。医師や医療関係者の視点と、疾病の視点、患者の視点の三者を組み合わせることを目標にしています。

■ 堀江 宗正 教授 (ほりえのりちか)  
専 門 死生学、宗教学  
現代のスピリチュアリティ、死生観、自殺の研究を専門としています。海外の死に関わる研究者との交流・協力、理論や学説の紹介に力を入れていきたいと思ひます。

■ 丸山 文隆 特任研究員 (まるやまふみたか)  
専 門 哲学  
人間の死と生に関するハイデガーの哲学の洞察を、現代形而上学および現代倫理学の文脈に接続させられるような仕方で解釈することを課題としております。

■ 陳 健成 特任研究員 (ちんけんせい)  
専 門 近世中国儒教史  
儒典の解釈(経学)を通じて、当時新しい儒学である朱子学がイデオロギーとされた明代に、皇帝の祖先祭祀の儀礼はどう変容したのかを明らかにしようとしています。

■ 矢口 直英 特任研究員 (やくちなおひで)  
専 門 医学史、思想史  
イスラーム世界における医学や科学思想の歴史が専門です。宗教の影響が強い社会を生きている人々が発展させていった人体観や世界観を研究しています。



左から、田村未希、早川正祐、会田薫子、安野裕美、坂井愛理

## Until Now

- 2002～2006年度……東京大学大学院人文社会系研究科  
21世紀COE「死生学の構築」(リーダー 島園進教授)
- 2007～2011年度……同 グローバルCOE「死生学の展開と組織化」
- 2007年度……上廣死生学講座発足  
特任教授 清水哲郎 特任講師 山崎浩司(総括監督者 島園進教授)  
(東京大学の死生学研究を強化すべく、公益財団法人上廣倫理財団の寄付金により設置)
- 2011年度……死生学・応用倫理センター発足(センター長 池澤優教授)
- 2012年度……上廣死生学・応用倫理講座(上廣死生学講座の改組、拡充)  
特任教授 清水哲郎 特任准教授 会田薫子(総括監督者 榊原哲也教授)  
(山崎浩司特任講師は信州大学に准教授として転出)
- 2013年度……死生学・応用倫理センターに堀江宗正准教授着任 上廣講座に特任研究員3名着任  
(早川正祐特任研究員は同年度末に三重県立看護大学に准教授として転出、  
園増文特任研究員は2014年度に東北大学に助教として転出、  
宮村悠介特任研究員は2014年度に愛知教育大学に助教として転出)
- 2015年度……上廣講座に特任研究員2名(山本崇美子、田村未希)着任
- 2016年度……清水哲郎特任教授が岩手保健医療大学に学長として転出
- 2017年度……上廣講座第3期開始 特任教授 会田薫子 特任准教授 早川正祐  
(総括監督者 榊原哲也教授、2020年度より池澤優教授)
- 2018年度5月……死生学・応用倫理センターに小松美彦教授着任
- 2020年度……上廣講座に特任研究員1名(坂井愛理)着任
- 2021年度……死生学・応用倫理センターに鈴木晃仁教授着任

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics,  
Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 法文2号館3階25号室  
Rm. 25, Bldg. Hobun No.2, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan  
Tel & Fax: 03-5841-2656 e-mail: dalsjp@l.u-tokyo.ac.jp https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls